

沖縄の藍染料に関する史料紹介（４）
—『沖縄の染織工程』の中の琉球藍と染織工程の記録—

大湾 ゆかり

Introduction of historical materials on indigo dyes in Okinawa(4)
— Record of Ryukyu indigo and dyeing and weaving process in "Okinawan dyeing and weaving process"—

Yukari OWAN

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第18号別刷

2025年3月14日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.18
March, 2025

沖縄の藍染料に関する史料紹介(4) —『沖縄の染織工程』の中の琉球藍と 染織工程の記録—

1) 大湾 ゆかり

Introduction of historical materials on indigo dyes in Okinawa(4)
—Record of Ryukyu indigo and dyeing and weaving process in
"Okinawan dyeing and weaving process"—

Yukari OWAN¹⁾

はじめに

琉球藍は、琉球王国時代から現代にいたるまで沖縄で生産され最も多く用いられてきた藍染料である。この染料の製造工程で使われていた「藍壺」の遺構について調べ始めて以来、琉球藍の歴史と製藍技法に興味を抱き、今日まで史料の発掘や製造者への聞き取り、参与観察等を行ってきた。そのうち、当館博物館研究紀要では、沖縄の藍染料に関する史料をこれまで四回にわたって紹介した。そこで、今回は令和六年度博物館企画展「芭蕉布展」で展示した沖縄県公文書館所蔵の『沖縄の染織工程』(図1)を取り上げ、琉球藍に係る染織技法の記録を抜き出して翻刻し紹介する。

この資料との出会いは、筆者がまだ沖縄県公文書館に籍を置いていた頃のことであった。平成十五年、明治時代の地方官僚であった西常央が残した資料一七四点が同館に寄贈された。これらの多くは西の辞令書や勤勉賞状、書簡等であるが、その中に芭蕉の製作工程を描いた絵図が載った一冊の資料が含まれていた。しかしながら、その簿冊は、水濡れによる汚損やカビ、紙の老けなど著しく損傷しており、頁をめくることがすら困難な状態であった。当時、同館の修復担当であった筆

者は、本資料の劣化状態を調査し、応急処置として本紙を解体して伸展する作業を行ったが、その後公文書館から異動したため修復することができなかった。

そのことが常に心残りであり、もしこの資料ともう一度再会することができれば、ぜひ修復して適切に保存してもらいたいと思っていたところ、今回の芭蕉布展を機に公文書館職員とともに修復する機会を得た。その詳細については、同館の職員の報告があるかと思うので本稿では触れないが、いずれにしても、今回の処置により本資料は利用できる状態になり、また高精細な画像撮影も行われたので、内容の解説ができるようになった。そこで、本資料の中から筆者が研究対象とする琉球藍に関連した項目として、「芭蕉芋製造法」「紬染入法」「細布八重山島之調」、そして「藍植付之季節」という四つの項目の翻刻を試みて、その内容を解説したい。

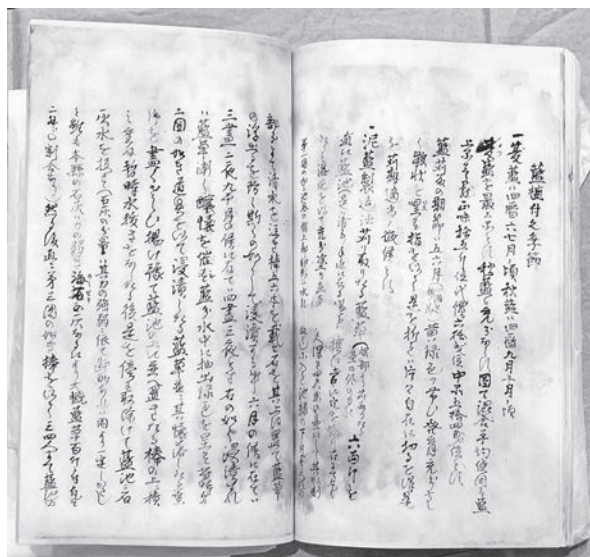


図1 『沖縄の染織工程』資料写真

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

第一章「西常央文書」と『沖縄の染織工程』の概要

『沖縄の染織工程』は、沖縄県公文書館所蔵の「西常央文書」群に含まれるものである。西常央（一八四八～一八九八）は平戸藩出身で、長崎県警察署等の勤務を経た後、一八八〇年（明治十三）十一月に沖縄県八等警部兼検事補として赴任し、島尻役所長、八重山島役所長、首里役所長兼中頭役所長等を歴任した人物である。西は任中に琉球文学資料や生物標本等を収集したことが知られている。また、一八九七年（明治三〇）には、鳥居龍蔵の来島の機に小川鑑太郎、和田規矩夫、太田朝敷、黒岩恒らと沖縄人類学会を立ち上げるなど、沖縄の自然と文化に関心をもち、外来の研究者とのかけはしになった人物である。

西が残した資料は、琉球大学名誉教授の池宮正治氏の手を経て沖縄県立博物館、沖縄県公文書館、那覇市歴史博物館に分蔵され、そのうち沖縄県公文書館には一七四件の資料が収められた。今回紹介するのは、同館のID:0000087159で登録名称が『沖縄の染織工程』というものである。本書には三十二の項目が収録されており、その内容は種々の農作物栽培法や沖縄の染織技法から害虫防除法まで農事に関する幅広いものとなっている。

中でも最も多くの頁を割いて記録されているのが「芭蕉芋製造法」であり、こちらは前半に二項と図版頁があり、続いて「木村純一郎大人調」と付記された写本頁が収録されている。残念ながら前半部分は欠損が多く、完全に解読することはできない。しかし、図版を挟んでこれを写本したとみられる部分は、照合の結果、前半部分とほぼ同じ内容が記録されていた。そこで、芭蕉布展においては写本記事から原文を起こしパネル等で紹介した。本稿でも同様に後半の写本を基軸にし、一部前半と異なる部分にのみ注釈を入れた。

このほか紹介する「紬染入法」と「細布八重山島之調」は、久米島紬と八重山上布に係る項であり、一部藍染の記述もあるので取り上げた。最後に紹介する「藍植付之季節」の項には、琉球藍の栽培から製藍、さらに藍建てまで詳しく記されている。この資料を収集した西常央の在沖期間（一八八〇～一八九八年）を考えると凡そ明治二〇年代の記録と考えられる。この頃の製藍工程について伝える資料も少なく、当時の沖

縄の染織やその他の農作物について知ることができる大変貴重な資料である。

なお、本文の翻刻にあたっては、主に資料の画像データ（公文書館ID:0000251719）から文字起しをし、変体仮名についてはできる限り現代仮名に直して表記し、誤字と思われる字はその後に（〇〇カ）と付記した。また、解読できない文字は□、欠損等で読み取れない文字は■と表記した。翻刻の中の（〇〇／〇〇）は原文では「／」で改行し二列を表す。図版については、収録頁から本文に対応する絵図を切り抜いて掲載した。各図版中の「甲」「乙」「丙」「丁」「戊」「己」は原本では朱書きで不明瞭なので、新たに図の指示する箇所に書き加えた。各項の翻刻の後で口語訳を試みた。訳中では内容の一部を意識した。

第二章 資料の翻刻と口語訳

（一）芭蕉芋製造法（注一）

〔原文翻刻〕

芭蕉芋製造法 木村純一郎大人調（注2）

一 芭蕉ハ植付后三年ノ株ヲ伐り取り（四月／十月）第一図ノ如ク甲ノ芭蕉ヲ逆ニ立テ上部ノ皮拾五六枚ヲ剥取り（注3）乙ノ如ク巻キ木灰ヲ水ニ和シ是ヲ以テ煮ル（是ヲ煮テ／芭蕉布ト云（注4））中部ハ小刀ヲ以テ薄ク剥取り丙図ノ如ク積置キ又内部ノ皮モ同様剥取り他ニ積ミ置キ各三等ニ芋ノ位ヲ區別ス但第一図中丁ハ芭蕉ノ切口ヲ示シタル物ナリ甲ノ芭蕉一二周リ剥取り柔弱ノ所ハ時々一二寸ツ、丁ノ如く伐り捨ルモノナリ

一 第二圖甲ハ煮芭蕉芋戊ノ（注5）竹クダニテ挟ミ織緯（維カ）ヲ取り乙ノ如ク蔭干シ終テ中部ノ皮ノ織緯取り始ム（干シ方ハ／乙ノ如シ）又終レハ丁ノ内部ノ皮ニ著手スルモノナリ如是三等ニ區別シテ上部ハ下等中部ハ中等内部ハ上等ノ芋ヲ得ルモノナリ但戊ハ竹ノクダ（ダカ）ノ圖己ハ陶器杯（注6）ニ水ヲ入レ時々クダニ水ヲ潤スモノナリ

一 第三圖甲ハ第一図中乙ノ皮ヲ鍋ニ入レ煮ル所ヲ示スモノナリ圖ノ如ク火ヲ燃シ沸騰スルトキハ蓋ヲ取り除ケ乙ノ木製ノ櫛ヲ以テ上下繰

廻スコト一回ス

一 第四圖甲ハ第二圖丙ノ芋ヲ巻キ乙ノ陶器ニ水ヲ入レ二個ツ、浸シ置キ芋糸ヲ續(續力)ケ(水ニ浸スコト度ヲ過レハ腐敗ノ恐れアリ)丙ハ經糸(糸質ノ強キモノ)ヲ入レ丁ハ緯糸(糸質ノ次ナルモノ)ヲ入レルモノナリ

一 第五圖甲ノ竹製ノ籠ニ第四圖丙ノ經糸ヲ入レタルヲ以テ紡車ヲ廻スコト三回緯糸ハ廻スコト五回ニシテ各乙ノ盆ニ區別シテ置クモノナリ
一 第六圖甲ハ長サ二尺位ノ竹ニテ作り丙ハ端ニ小竹ヲ立テ經緯ノ糸ヲカナニナシ色染ノ便ニ供ス(或ハ此カナヲ木灰ヲ和シ之ヲ以テ煮製布スルモノアリ)

一 第七圖芭蕉芋糸ヲ藍染ニナスノ方ヲ示ス甲ハ花藍ヲ入レ(花藍トハ染始ノ藍ナリ)乙ハ中藍ヲ入レ(中藍トハ數ノ回染タル藍)丙ハ地藍ヲ入レ(地藍トハ數十回染ノ追テ捨テントスル藍也)經緯ノカナヲ丙ノ地藍ヨリ染メ始メ戊ノ如ク日光ニ干シ又乙ノ中藍ニ染メ前ノ如ク干シ又甲ノ花藍ニ染メルモノナリ染終テ丁ノ櫛ヲ以テ甲乙丙共攪廻シ朝夕二度ツ、染メルモノトス

一 第八圖ハ第二圖ノ丁ノ内部ノ上等芋ヲ水ニ浸シ甲ノ如ク竹ニ巻キクダニテ剥取り織緯ヲ一ツ一ツニ分離セシメ乙ノ如ク割竹ニ挟ミ丙ノ匣ニ緯糸ヲ續(續力)キ入レ丁ノ糸巻ニ經糸ヲ巻キ最上等ノ白布ヲ製ス

一 機ハ内地ノ地機ト異ナルコト(注7)無シ

〔口語訳〕

芭蕉芋製造法 木村純一郎大人調

一 芭蕉は植付後三年の株を刈り取り(四月十月)、第一図のように甲の芭蕉を逆に立て、上部の皮十五、六枚を剥ぎ取り、乙のように巻き、木灰を水にあわせてこれで煮る(これを煮て芭蕉布という)。中部は小刀で薄く剥ぎ取り、丙図のように積み置き、又内部の皮も同様に剥ぎ取って他に積んで置き、各々三等に芋の位を区別する。ただし、第一図中丁は芭蕉の切り口を示したものである。甲の芭蕉一、二周り剥ぎ取り、柔弱のところは時々一、二寸ずつ丁のように切り

捨てる。

一 第二図 甲は煮芭蕉芋を戊の竹管で挟み繊維を取り、乙(注8)のように陰干しし、終えたら中部の皮の繊維を取り始める(干し方は乙と同じ)。これを終えたら丁の内部の皮に着手する。このように三等に區別して、上部は下等、中部は中等、内部は上等の芋を得る。ただし、戊は竹の管の図、己は陶器などに水を入れ、時々管に水を潤すものである。

一 第三図 甲は第一図中乙の皮を鍋に入れ煮るところを示している。図のように火を燃やし沸騰したら蓋を取り除き、乙の木製の櫛で上下を一回繰り回す。

一 第四図 甲は第二図丙の芋を巻き、乙の陶器に水を入れて二個ずつ浸して置き、芋糸を續む(水に浸しすぎると腐敗する恐れあり)。丙は經糸(糸質の強いもの)を入れ、丁は緯糸(糸質の次なるもの)を入れるものである。

一 第五図 甲の竹製の籠に、第四図丙の經糸を入れて紡車を三回まわし、緯糸は五回まわして、各々乙の盆に區別して置く。

一 第六図 甲は長さ二尺くらいの竹で作し、丙は端に小竹を立て、經緯糸のカナ(総)を作り、染色のために準備する(あるいはこのカナ(総)に木灰を混ぜ、これで煮て布に製する場合もある)。

一 第七図 芭蕉芋糸を藍で染める方法を示す。甲は花藍を入れ(花藍とは染め始めの藍)、乙は中藍を入れ(中藍とは數回染めた藍)、丙は地藍を入れ(地藍とは數十回染めてやがて捨てようとする藍である)、經緯のカナ(総)を丙の地藍から染め始め、戊のように日光に干し、つぎに乙の中藍に染め、前のように干し、つぎに甲の花藍に染める。染め終えたら丁の櫛で甲乙丙ともかき廻し、朝夕二度ずつ染めることとする。

一 第八図は、第二図丁の内部の上等芋を水に浸し、甲のように竹に巻き管にて剥ぎ取り、繊維を一つ一つに分離する。乙のように割竹に挟み、丙の箱に緯糸を續ぎ入れ、丁の糸巻に經糸を巻き、最上等の白布を製する。

一 機は内地の地機と異なることなし。



第三図



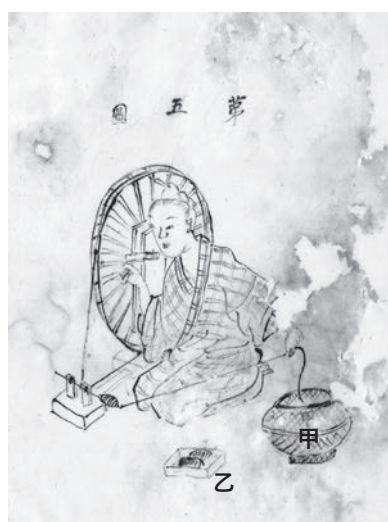
第二図



第一図



第六図



第五図



第四図



第八図



第七図 藍染の画面

図2 「芭蕉芋製造法」の中の挿絵 第一図～第八図

(二) 紬染入法 (注9)

〔原文翻刻〕

紬染入法

- 一 赤色蘚 (蘇力) 木ヲ充分ニ焚出シ其汁ニ明礬少量ヲ加ヘ之ヲ以テ染ム
- 一 黄色ハ干鬱金ヲ紛 (粉力) トナシ充分ニ焚出シ之ヲ以テ染ム
- 一 黒色ハ大キク木ノ葉ヲ焚出シ其汁ヲ以テ下染ヲナシ其後右ノ汁ニ田中ノ土ヲ交セ之ヲ染ム
- 一 江戸茶色ハクルハウ木ノ皮并ニ桃木ノ皮ヲ取交セ充分ニ焚出シ是ヲ下染トナシ其後右ノ汁ニ田中ノ土ヲ交セ是ヲ染ム
- 一 キカラ茶色ハ染方江戸茶色ト同様ニシテ染入度数少キノミ
- 一 煤竹色ハクルノ根ヲ充分焚出ス
- 一 深煤竹色ハ大キク木ノ葉ヲ焚出シ其汁ヲ以テ下染トナシ其後右ノ汁ニ田中ノ土ヲ交セ之ヲ染ム
- 一 トロ色ハ墨并大豆ヲ摺合其汁ヲ以テ染ム
- 一 青色ハ藍ヲ以テ下染トナシ其後蘚木ヲ焚出シ其汁ニテ染ム
- 一 右ノ内黄色ヲ除ク外ハ總テ汁ノ冷ルヲ以テ染ムルヲ良トス

〔口語訳〕

紬染入法

- 一 赤色蘇木 (注10) を十分に炊き出し、その汁にミョウバンを少量加え、これで染める。
- 一 黄色は干ウコンを粉にして十分に炊き出し、これで染める。
- 一 黒色は大キク木の葉を炊き出し、その汁で下染めし、その後この汁に田んぼの土を混ぜこれで染める。
- 一 江戸茶色は、クルハウ木 (注11) の皮と桃木の皮を取り混ぜ、十分に炊き出したもので下染めし、その後この汁に田んぼの土を混ぜこれで染める。
- 一 キカラ茶色の染め方は、江戸茶色と同様にして、染める回数が少ないのみ。
- 一 煤竹色は、クルの根を十分炊き出す。

- 一 深煤竹色は、大キク木の葉を炊き出し、その汁で下染めし、その後この汁に田んぼの土を混ぜ、これで染める。

- 一 トロ色は、墨と大豆を搗り合わせ、その汁で染める。

- 一 青色は、藍で下染めし、その後蘇木を炊き出し、その汁で染める。右のうち、黄色を除く他は、すべて冷ました汁で染めるのが良い。

(三) 細布八重山島之調 (注12)

〔原文翻刻〕

細布八重山島之調

- 一 麻苧ハ国頭中頭ノ産ヲ購求シ細布ノ上中下等品ニ随テ麻苧モ又上中下等ノ品ヲ撰ト雖モ概ネ上等品ヲ用ユ先細上布一反ノ要ニ熟浸スルコト凡一昼或ハ一夜其濡タル俚ヲ採揚ケ直ニ小刀ヲ以テ之ヲ扱キ惡質ヲ洗除シ日陰ニ掛干シ乾キタル后チ米粟苧ノ薄生糊ニ濡シ再ヒ苧 (竿力) ニ懸ケ乾キ次第日々手指ヲ以テ紡績ス其技術各優劣有ト雖凡一日一婦ニシテ麻苧目方三匁位ヲ製ス一反ニ用ル麻苧凡日数百廿日間ヲ費ス其仕上タル麻苧二斤四十目トナル其内堅筋トナスモノハ則チ紡績シタルヲ能ク糸ニナシ欲スル所ノ丈尺ニ伸ヘ是ヲカセニ掛ケテ淨水ニ濡シ晴天ニ晒ストキ成丈手強ク濡糸ヲ引張り適宜ノ石等釣下ケ蓋シ糸ノ伸縮セサルヲ要スルカ為ナリ而テ紺織ノ模様ヲ各手本ニ據リテ糸ノ間ヘ黒印シ其顆点ヲ芭蕉苧ニテ堅ク結ヒ而シテ后藍染方ニ着手ス
- 一 藍仕立方藍ハ概シテ本島ニ製スルモノヲ購求ストモ然レトモ其俚用ヒス之ヲ使用スルトキハ干シタル葉藍一斤ト木灰六合トヲ混和シ二箇ノ壺ニ分割一壺ニ水一斗二升ヲ入レ五六日間ヲ経テ水壺稍ヤ花ヲ催スニ從ヒ前條本寫製藍ヲ七斤半混淆ス后チ早キハ一週日遅キハ二週間ヲ経テ使用ス
- 一 麻苧染方一切ノ手續藍液瓶ニ細上布概畧一反ノ分染付ント欲セハ日二三回或ハ四五回モ染付一回毎ニ晴天ニ乾シ凡拾回以上廿回ニ至ルモノトス
- 一 織立ハ紺織ノ模様終リタルヲ箴ニ貫立假令ハ廿 (升力) 斤ノ細上布ニ用ルモノハ箴幅一尺五寸 (曲尺以下全シ) ノ目盛り總目

七百九十五目一舛ト称スルハ五十三目ノ貫糸ニシテ織立布巾一寸次二十八舛ト称スルハ目盛り七百二十目一舛ハ四十八目亦十七舛ハ目盛り六百七十五目一舛貫糸四十五目以上三種トモ紡績ノ細大而已ナラス麻苧調一切ノ等差ニ據ル且又(且又カ)織婦ノ技術長短ヲ謀リ品位ヲ正シ其機杼一切ノ機械ハ内地一般ノ古風を機杼ナリ則チ體操一己一反ノ施法尤織場所ハ適宜設クト雖故ラ二暗室ヲ好其故ハ専ラ光線ヲ受ル為メ小窓ヲ開キ織立ノ模様細目瞭然誤職(織力)センコトヲ要スル也凡一日二一尺五寸乃至織組(旦カ)其織口毎二前堅糸一尺乃至適宜薄湖(糊カ)ヲ指ニテ付ケ職尽ス日数ヲ費スコト品位ノ粗密ニ拠リ緩急アリト雖一反ノモノ概畧二十七日間トス仕上方一切ノ手續職(織力)揚タル細布凡日数五日間晴天ニ晒シ而シテ海中ニ投シ其法方ハ細布損傷セン為ニ二三尺毎二小竹ニ布ヲ割狭ニ凡三四日間浸ス潮ニ振晒シ引揚ケ直チ二晴天ニ晒シ乾毎二凡二十回乃至浦(雨カ)晒シ随テ品位ノ模様適度ヲ認メ浄水ニ六七回洗濯シ晴天ニ乾ス終リテ染藍或ハ地合等飛白ノ粗誤アルモノハ一々更ニ糸ヲ替拔シ仕上盤木ニ載セ片手拵長二三尺丸八寸位ノモノニテ細布ヲ白紙或ハ白木綿等ヲ冠セテ凡三四時間拵ニテ搗キ成セルモノトス

苧麻ノ圖
平戸ニテ云
草カフ□
又ハハンハン草
是ナリ



図3 「苧麻の図」

【口語訳】

細布八重山島之調

一 麻苧は国頭や中頭産を購入し、細布の上中下等品に対して麻苧も又上中下等の品を選ぶとはいっても概ね上等品を用いる。まず上布一反に要する苧は凡そ一昼あるいは一夜よく水に浸し、濡れたまま取りあげたら直ぐに小刀でこれを扱い悪質(な繊維)を洗い除き、陰

干して乾いた後、米粟苧の薄生糊で濡らし再び竿にかけ、乾き次第日々手指を使つて紡績する。その技術には各々優劣が有るといへども凡そ一日一婦人にして麻苧目方三匁位を製する。一反に用いる麻苧は凡そ百二十日間の日数を費す。できあがつた麻苧は二斤四十目となり、その内経筋にするものは紡績して良い糸を作り、必要な丈尺分に伸ばして総に掛け、浄水に濡らして晴天に晒す。このとき、濡らした糸を手で強く引つ張り、適宜石等を釣下げるのは、おそらく糸が伸縮しないようにするためである。こうして紺織の模様を各手本にそつて糸の間に黒印をし、その印の点を芭蕉苧で堅く結んだ後、藍染めに着手する。

一 藍建ての方法 藍は概して(沖繩)本島で製するものを購入するけれどもそのままでは用いない。これを使うときは、干した葉藍一斤と木灰六合とを混和し、二個の壺に分割する。一つの壺に水一斗二升を入れ五六日間を経て壺の水にやや花が表れてきたら、前述の本島産の製藍を七斤半混入する。その後早ければ一週間、遅ければ二週間が経つて使用する。

一 麻苧の染め方の工程では、藍液の瓶(甕)に大体一反分の細上布を染め付けようとすれば、一日に三回あるいは四五回も染めて一回毎に日光で乾すこと凡そ十回以上二十回まで行ふ。

一 織り始めは、紺織の模様の終りを箴に貫き入れる。仮に二十斤の細上布に用いるものは、箴幅一尺五寸(曲尺以下同じ)の目盛り総目七百九十五目を一舛という場合は、五十三目の貫糸にして織りあげる布巾一寸である。次に十八舛という場合は、目盛り七百二十目、一舛は四十八目、また十七舛は目盛り六百七十五目、一舛の貫糸四十五目以上で、三種とも紡績の細かさだけでなく、麻苧の調子全体の等差による。且また織婦の技術の長短を謀つて品位を正し、機や杼などすべての機械は内地一般の旧式の機杼であり、一人で操作して一反を仕上げる。製織場所は適宜設けるといへども、わざわざ暗室を好むので、専ら光を得るために小窓を開き、織り模様の細かい目をはつきりさせ誤織しないことが求められている。凡そ一日に一尺五寸、あるいは織始めの織口ごとに前の経糸一尺乃至適宜薄糊

を指で付け機織りする。日数を費すこと品質の粗密さによつて緩急あるとはいへ、一反大体二十七日間かかる。

一 仕上法の全工程 織りあげた細布を凡そ五日間晴天に晒し、それから海中に投じる。その方法は細布を損傷させないため二三尺毎に小竹で布を割狭み、凡そ三四日間浸す。潮に振り晒し引揚げて直ちに晴天に晒す。乾く毎に凡そ二十回あるいは雨晒しし、品質の模様が適当だと認められたら浄水で六七回洗濯し、晴天にて乾かす。終わら藍染あるいは地合等の飛白（緋）に粗誤があるものは一々さらに糸を抜き替えて仕上げ、盤木に細布を載せて白紙あるいは白木綿布を被せ、長さ二三尺直径八寸位の片手杵を持つて凡そ三四時間搗き仕上げる。

苧麻の図 平戸で云う草カフ□、又はハンハン草はこれである

（四）藍植付之季節（注13）

〔原文翻刻〕

藍植付之季節

一 夏藍ハ旧曆六七月ノ頃秋藍ハ旧曆九月十月ノ頃

夏藍を最上品とす秋藍ハ充分ならず因て混合平均使用す藍上品は正味拾五斤位代價六拾錢位中品五拾四錢位とす

藍苧取の期節ハ五六月（小満芒ノ種ノ節）黄綠色ヲ帶ひ發育充分少しく皺状を呈す指を以て是を折れハ片々自在に切るを得是を苧期適當ノ徴候とす

一 泥藍製造法苧り取りたる藍草（根部より苧取りたるノ茎の俣のもの）六百斤を直に藍池（是ハ清水手近に在る場所□撰ひ土中に穴を掘り石にて丸く■りて漆灰を以て充分塗り立直■尺深さ四尺余の壺にして其形則第一図の如シ池底ノ稍上部卵形の水孔■設く）に入れ池縁の下凡壹尺程の部分まで清水を注ぎ棒五六本を載せ石を其上に置いて藍草の浮出るを防く斯くの如くして浸漬する事六月の候に在てハ三晝二夜九十月の候に在てハ四晝三夜とす右の如く浸漬すれハ藍草漸く醸懷を催シ藍分水中に抽出綠色を呈す當時第二図の如き道

具を以て浸漬したる藍草並ニ其懷落したる葉片を盡くさらひ揚げ豫て藍池の上に並へ置きたる棒の上ニ積ミ重ね暫時水抜きをなしたる後は是を傍に取除けて藍池ニ石灰水を投ず（石灰の分量ハ其力の強弱ニ依て斟酌あれハ固より一定しかたしと雖も本縣の石灰ハ力の弱き海石^{カイシ}の灰なるにより大概藍草百斤ニ付凡そ二升の割合なり）然る後直ニ第三図の如き棒を以て三四人にて藍池の縁に立凡一時間程頻に攪拌す攪拌の始めは藍水淡綠色なれ共斬々暗色を呈し層濃色となり暗黒色に至るを度として攪拌を止め一夜其俣に放置し翌朝ニ至れハ藍分悉く池底に沈殿して池水の色ハ茶褐色に変ず是ニ於て排水孔をひらき池水を去れハ池底に残るものハ濃藍色ノ液なり是を水藍といふ藍池の傍に第四図の如き製藍池（此構造ハ上部より下部ニ向ふに従ひ斜降する便なり）在り是に藺席を敷き水藍を汲ミ移し置けハ水分徐々流去ル十二時間乃至二十時間を経れハ泥藍となる則琉球藍と称して染料に供する物は是なり藍草百斤より得たる所の泥藍通常三十斤乃至三十五斤とす

一 溶解法（灰力ノ最強き）三升到水五升を加へ鍋に入れ一回沸騰せしめ灰滓を去て煎水を桶に移し泥藍四十斤を投して攪拌し泡盛（沖縄焼酎）壹合を入れ而後日に兩度つゝ静に攪拌すれハ四五日にして黒色より青色を呈し藍泡を生ず此時ハ染糸の適期なり

一 染付法藍桶にハ新ニ溶解したるものと溶解久しきを経て数回の染糸に供したものとを別なく甲ハ仕揚げに用ひ乙ハ地染に用ふ糸を染るにハ手を以てもみつけ干て染る事四五回乃至七八回に至ル

一 藍移植の適否本縣の藍ハ根分をなして移植する事なし五六月或ハ九十月の頃成熟亘きものを撰ミ是を苧取りて挿植す其後苧株適期に至て收穫し能く腐敗した植物質の肥料（青草木葉等より成る堆積肥の如きもの）を施し土を以て其上を覆ひ置けハ藍草株側より勢よく成長して充分の收穫を得へし斯の如く肥料の手当を怠らす充分保獲を加へて栽培すれハ四収（二ヶ年間）迄ハ利益あるへし然れとも四収期を過れハ株高く成りて不便尠からざる□□寧新苗を挿植するの勝るにしかす

一 土質乾濕中等の地にして肥沃なる所を宜とす日光の直射烈き所は

日覆を要す

圖二 圖三 圖四
圖一

〔口語訳〕

藍植付の季節

一 夏藍は旧曆六七月の頃、秋藍は旧曆九月十月の頃、夏藍を最上品とし、秋藍は充分な品でないので、混ぜて平均にして使用する。上品な藍ですら正味十五斤位で代価は六十錢位、中品は五十四錢位である。藍を苅り取る季節は五六月（小満芒種の節）で、黄緑色を帯び充分發育し、少し皺状を呈して指で折ると一片が自在に切れるようなら苅時として適当な徴候である。

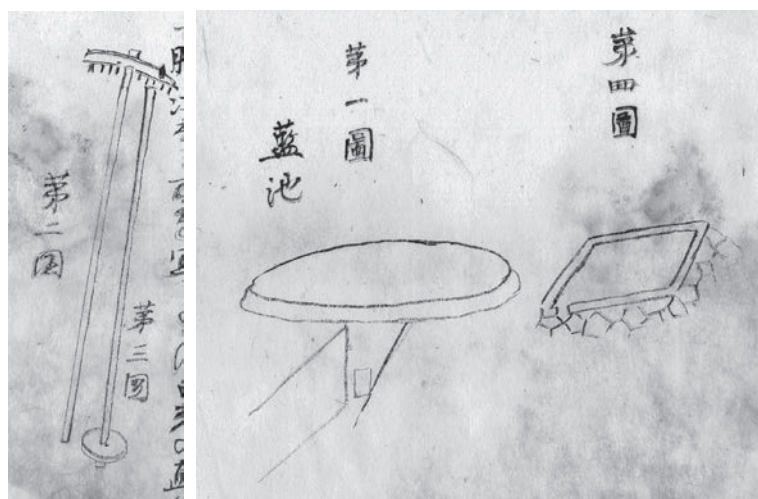


図4 「藍植付之季節」 第一図～第四図

一 泥藍製造法 刈り取った藍草（根部より刈取る茎のままのもの）六百斤を直に藍池（これは清水が近くにある場所を選んで土中に穴を掘り石で丸く加工して漆喰を充分塗り立てる。（欠損）深さ四尺余の壺にして形は第一図の通りである。池底のやや上部に卵形の水孔を設ける）に入れ、池縁の下の方一尺程まで清水を注ぎ、棒五六本を載せ石をその上に置いて藍草の浮き出るのを防ぐ。このようにして浸漬すること六月の頃には三昼二夜、九十月頃には四昼三夜となる。右のとおり浸漬すれば藍草はだんだん醗酵し、藍分が水中に抽出して緑色を呈する。その頃に第二図のような道具をもつて浸漬している藍草ならびに溶けてしまった葉片を悉く引き揚げ、前

もつて藍池の上に並べて置いてある棒の上に積み重ねる。暫時水抜きをした後、これを傍に取り除いて藍池に石灰水を投入する（石灰の分量はその力の強弱によつて加減するので元々一定ではないけれども、本県の石灰は力の弱い海石（サンゴ）の灰であるので大概藍草百斤に付き凡そ二升の割合である）。こうした後、直ちに第三図のような棒を持つて三四人で藍池の縁に立ち、一時間程頻繁に攪拌する。攪拌の始めは藍水は淡緑色であるが、次第に暗色を呈して一層濃色となり、暗黒色になつてきた時分をみて攪拌を止める。一夜そのまま放置し、翌朝なれば藍分は悉く池底に沈殿し、池の水の色は茶褐色に変わる。これにて排水孔を開き池水を除去すれば、池底に残っているものは濃藍色の液である。これを水藍という。藍池の傍に第四図のような製藍池（この構造は上部より下部に向うに従つて都合よく斜降する）がある。これに筵を敷き水藍を汲んで移し置けば、水分は徐々に流れ去る。十二時間から二十時間排水して泥藍となる。これが則ち琉球藍と称して染料に供するものである。藍草百斤より得られる所の泥藍は、通常三十斤から三十五斤である。溶解法（力の最も強い灰三升到水五升を加えて鍋に入れ、一回沸騰させて灰滓を除き、煎水を桶に移し泥藍四十斤を投じて攪拌し、泡盛（沖繩焼酎）一合を入れる。そうして日々毎回静かに攪拌すれば、（藍液は）四五日して黒色より青色を呈し、藍泡を生ずる。この時分が藍染めの適期である。

一 染付法 藍桶には新しく溶解したものと溶解してしばらく経ち数回糸染めに供したものとを別なく、甲は仕上げに用い、乙は地染に用いる（注14）。糸を染めるには手でもみつけ、干して染めること四五回から七八回行う。

一 藍移植の適否 本県の藍は根が付いたものを移植することはしない。五六月あるいは九十月の頃、良く成熟したもの（藍草）を選んでこれを刈り取つて挿植する。その後、苅株の適期に収穫し、よく腐敗した植物質の肥料（青草木葉等から成る堆積肥のようなもの）を施し、土でその上を覆つておけば藍草の株は、より勢よく成長して充分の収穫が得られる。このように肥料の管理を怠らずに充分

に保護を加えて栽培すれば、四収（二ヶ年間）までは利益がある。しかし、四収期を過れば株は高くなって不便が少なくなないので、むしろ新苗を挿植する方がよい。

一 土質は、乾湿中等の土地で肥沃なる所を良しとする。日光の直射が強い所では光は覆う必要がある。

図二 図三 図四 図一（図4）

第三章 解説

本章では、前章までに紹介した四項の内容から、琉球藍や藍染めに関する部分を抜き出して解説する。

（一）芭蕉芋製造法 木村純一郎大人調

本項の内容に入る前に、まず表題の下に記された「木村純一郎大人調」について取り上げる。

木村純一郎は、福岡藩出身で沖縄県農事試験場に明治十九年から三十二年まで勤務したことがわかっている。木村は、沖縄を離れたのちに沖縄の風俗や動植物を描いた全長十八メートル余にもわたる「沖縄風俗画」（沖縄県立博物館・美術館蔵）（注15）を製作し、沖縄の動植物や風俗、農事試験場の鳥観図などを絵図と文章で残している。本資料では、写本部分に「木村純一郎大人調」とある。この「大人」とは「徳のある立派な人」という意があり、「調」は「調査」と解される。ということとは、後半部分の写本は、木村を敬う第三者が、彼の調査を写し取ったものと考えられる。一方、前半の筆記と後半の写本部分は若干の書き足しがある程度でほぼ同じ内容であるが、筆記の仕方などから見ると別の人物が描いていると思われる、また芭蕉芋の製造工程の描画等も作業動作が再現できるほど細部にわたって描写されているので、木村本人が描いた可能性が高い。内容は、イトバショウの栽培から糸を績むまでの工程の記録（注16）で、明治時代の芭蕉芋製造法がわかる貴重な資料である。

つぎに、本項の中で第七図と関連して、芭蕉芋糸の藍染めに関する記述があるので、その概要を紹介する。

藍建てした藍には三種あり、新しく仕込んだ染め始めの藍を「花藍」、すでに数回染めに使った藍を「中藍」、さらに数十回染めきつて捨てようとしている藍を「地藍」と称す。芭蕉芋糸を藍で染める方法は、藍甕に花藍、中藍、地藍をそれぞれ入れ、経緯の総糸を地藍の甕より染め始め、日光に干し、つぎに中藍で染めて干し、最後に花藍に染める。染め終えたら櫛で三種の藍甕の藍を混ぜ廻す。毎日、朝夕二度ずつ染める。以上の記録により、芭蕉芋糸を染め方は、地染めから仕上げに使う藍を三種類に区別して、始めは古い藍から染め、仕上げで新鮮な藍を使ったことがわかった。また、それぞれの藍の呼称についても確認できた。

（二）紬染入法

本項は、紬糸を染める材料として九色の染料について記されている、このうち、青色は藍を使つて染めたところがあるが、藍は下地染に使い、この上から蘇芳の木を煮出した煎汁で染めたところがある。これがどのような色であつたか興味深い記述である。また「紬」であるので、久米島紬を指すと推察される。

（三）細布八重山島之調

本項は「八重山上布」に関する記述と思われる。本文の中に紺の模様の染め方について言及がある。それによると、紺織の模様は各手本に沿つて糸の間に印をつけ、その印を芭蕉芋で固く結んで藍染めに供する。藍は本島産のものを購入しているが、使用時にはそのまま用いるのではなく、干した葉藍一斤と木灰六合を混ぜて二つの壺に分割して入れ、一つの壺に水一斗二升を入れ、五六日経つて花（藍華）が表れたら本島産の製藍を七斤半混入し、一週間から二週間を経て使用する。

麻芋糸の染め方は、一反分の総糸を染めるには一日に三回から四五回染めて、一回ごとに天日で干し、これを凡そ十回から二十回行う。（中略）織り上げた細布は凡そ五日間、海水に振り晒し、引き揚げて晴天に晒して乾かすこと凡そ二十回行い、浄水に六七回洗濯して晴天にて乾かす。終わつたら藍染め等の模様に齟齬があるものは一つずつ糸を抜き替える。この後、白紙や白木綿をかぶせて杵で三四時間搗き仕上げる。

以上が本項で藍に関係する部分である。ここで興味深いのは、本島産の藍を使う前に、干した葉藍を一斤と木灰を混ぜて水を投じ発酵させておくということである。この葉藍がリュウキュウアイなのか、タデアイなのか、あるいは八重山地方で栽培されているナンバンコマツナギやタイワンコマツナギであるのかは不明だが、アイ葉を干して使うという方法は、現在宮古島で行われているタデアイの利用方法と共通しているもので、この方法の由来が見える事例かもしれない。

(四) 藍植付之季節

本項では琉球藍に関する記述が、栽培から製藍、藍染めまで詳しく掲載されている。その内容をまとめると次のとおりである。

◇栽培

藍の移植は、五六月あるいは九十月の頃、良く成熟した葉を選んで刈取り挿し木する。植物質の肥料（青草や木の葉等からなる腐葉土）を施し、土でその上を覆えば株は勢よく生長し、充分な収穫が得られる。肥料の管理を怠らずに栽培すれば、二年間で四回収穫できる。刈取りは旧暦五六月（小満芒種の節）と九十月。黄緑色を帯び充分発育し、皺があり指で自在に折れる頃が適期である。

◇泥藍製造法

刈取った藍草六百斤を直に藍池（土中に穴を掘り石で加工して漆喰を塗った深さ四尺余りの水槽）に投入し、縁の下約一尺まで清水を注ぎ入れ、棒五六本を載せ石をその上に置き、静置する。六月の頃は二泊三日、九十月では三泊四日ほど浸漬すれば、藍草は発酵し藍分が水中に溶け緑色を呈する。頃合いを見て藍草や溶けた葉片を引き揚げ、藍池の上に並べた棒に積み重ね水抜きした後、これを傍らに取り除き、藍池に石灰水を投入する。石灰の分量はその力の強弱によるが、サンゴ灰は藍草百斤に付き凡そ二升の割合である。

つぎに、第三図の棒を持ち三四人で一時間ほど頻繁に攪拌する。次第に水の色は濃くなって暗黒色に変わったら攪拌を止め、一夜ほど静置する。翌朝、排水孔を開いて上澄み液を除去すれば、池底には濃藍色の液が残る。これを「水藍」という。藍池の傍らもある製藍池（この構造は

上部から下部にかけて斜降した構造）に筵を敷き、水藍をくみ上げて水分を流し去る。十二時間から二十時間排水したものが「泥藍」、すなわち「琉球藍」である。藍草百斤から泥藍は通常三十斤から三十五斤得られる。

◇藍建て法

灰汁（力が最も強い灰三升に水五升を加えて鍋に入れ、一回沸騰させ滓をとった煎水）を桶に移し、泥藍四十斤を投じて攪拌し泡盛一合を入れ、毎日静かに攪拌する。四五日して黒色より青色を呈し藍泡ができてきた頃が藍染めの適期である。

染め方は、新しく建てた藍と数回の染めで使ったものを分け、新しい藍は仕上げ用に用い、数回使用した藍は地染めに用いる。糸を染めるときは手でもみこんで干す工程を四五回から七八回繰り返す。

以上の四項目の内容から本資料が記録された頃の製藍法は、概して現在まで受け継がれてきた沈殿法の製法と変わらないことがわかった。しかし、本書で新しい知見となったこともある。そこで最後に、筆者が気になった点を幾つか拾い出して言及しておきたい。

はじめに、名称について取り上げる。本書では、まずアイ葉は「藍草」、藍壺は「藍池」と称している。また、攪拌後に沈殿させ上澄みを除去した藍を「水藍」と呼び、これを筵で濾して濃縮したものを「泥藍」と記している。本書の作成年は不詳だが、少なくとも木村純一郎や西常央が沖繩にいた期間に調査されたと考えられると、明治三十二年以前ということになる。ちなみに、同時期の新聞紙上では、アイ葉は「山藍」あるいは「葉藍」、沈殿藍は「泥藍」との表記が多いが、伊豆味では「イエー」「イエーダマ（藍玉）」と呼んでいたとのこと。琉球藍に関する名称は、時代や場所によって違うので、これらを整理する必要があると思う。

つぎに、肥料について本書では草木や木葉を堆肥化した、いわゆる腐葉土を使うとある。これまでの調査では、藍作には肥料は不可欠で、後に「イエーチュクヤヤー、ウシカライ（藍作人は、牛を飼いなさい）」といわれるほど家畜の厩肥作りを重視していたと思われるが、ここではあえて草木や木葉を十分に熟させたものと説明しており、家畜に触れて

いない。現在、新しい畑を開くときに牛糞や鶏糞を使うが、植付け時は堆肥の方が有効なのか、肥料についても改めて調べる必要性を感じた。

つぎに、「藍池」と称した藍を漬け込む装置については、構造は「土中に穴を掘り石で丸く加工して漆灰で塗り立てた深さ四尺（百二十一センチ）程度の壺」とのこと、筆者が調査した藍壺の遺構の深さや形状に近似する。興味深いのは、ここで「漆灰」を塗り立てるという記録である。「漆灰」とは何か推測したところ、「漆喰」を指すと考えた。すると、明治二十年代にはすでに藍壺が作られ、しかも漆喰で塗り固められていたことになる。

一方、明治二十一年に刊行された『山藍新書』（石井清吉著）には、当時アイ葉は「藍桶または藍甕」に漬けたとの記録があり、藍壺について言及はない。したがって、土中を掘り込んで形造った藍壺の登場は、明治二十年代のこと、その頃何らかの技術革新があったのかもしれない。これについても引き続き研究課題としたい。

おわりに

今回紹介した『沖縄の染織工程』は、西常央文書に含まれて残されてきたものである。西が沖縄の資料収集を行ったおかげで、往時の芭蕉布

や八重山上布の製作工程、あるいは琉球藍の栽培から製藍、藍建てまでの方法を知ることができる。しかし、本書を記した人物が誰なのかは判然としない。唯一の手掛かりは「木村純一郎大人調」という「芭蕉芋製造法」の記録に添えられた人物名である。本書に描かれた芭蕉布の製造工程や製藍に使う道具、施設の絵など、もし木村が書いたものだとしたら、木村純一郎が沖縄に逗留していた期間の記録、すなわち明治三十二年までの記録と考えられる。引き続き本書の作成年代の特定についても調べていきたい。

今回の翻刻にあたっては、欠損や解読できない文字が多く不十分な点多々あるが、沖縄の染織研究にとっても重要な資料だと考えているので、あえて未読部分も交えて掲載した。本資料には、今回紹介した四つの項目以外にも農作物や害虫処理等の記録がある。沖縄県公文書館で閲覧することができるので活用していただければと思う。

最後に、本稿の執筆にあたり、翻刻作業でご教示いただいた里井洋一氏と大城直也氏、及び小野まさ子氏に感謝の意を表する。

(注1) 公文書館の画像データ0000251719-00008-0016から翻刻した。

表題の「芭蕉芋」は原文のまま

(注2) 文中「木村純一郎大人調」は写本頁のみ記された文字。

(注3) 文中「(四月十月) 第一図ノ如ク甲ノ芭蕉ヲ逆ニ立テ上部ノ皮拾五六枚ヲ剥取り」は、写本頁のみ記された文字。

(注4) 文中「布ト云」は、写本頁のみ記された文字。

(注5) 文中「戊ノ」は、写本頁のみ記された文字。

(注6) 文中「杯」は、写本頁のみ記された文字。

(注7) 文中「コト」は、写本頁のみ記された文字。

(注8) 「乙」は図2の第二図の欠損部分に記されていたと思われる。

(注9) 公文書館の画像データ(同上) 0016-0017から翻刻した。

(注10) 「蘇木」はスオウのことと考えられる。

(注11) 「江戸茶色」は黄味の暗い茶色で、「クルハウ木」はリュウキュウガキのことと考えられる。

(注12) 公文書館の画像データの0017-0019から翻刻した。

(注13) 公文書館の画像データの0022-0023から翻刻した。

(注14) ここで記された「甲」「乙」に対応する図版は記されていない。

(注15) 本書53ページに掲載されている伊禮拓郎氏の論文で、木村純一郎著の「沖縄の風俗図」を取り上げているので参照していただきたい。

(注16)

芭蕉の芋剥ぎ工程では、上部の皮は下等でこれのみ煮て繊維を採るとある。中部の皮は中等、内部の皮は上等で生のまま芋績みする。特に内部の上等芋は竹に芋を巻き、足で竹管を抑えて剥ぎ取り、繊維を一つ一つに分離し、さらに割竹に挟んで繫いでいく方法が記されている。これは上部の皮のみ煮て、中部内部が生引きしていたことを示す貴重な内容である。

(参考資料)

- ・ 沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』(一九八三) 沖縄タイムス社
- ・ 天野鉄夫『琉球列島植物方言集』(一九八九) 新星図書出版
- ・ 板倉寿郎他監修『原色染織大辞典』(一九七七) 淡交社
- ・ 石井清吉『山藍新書 全』(二八八八) 文英社